



下原刀鍛冶二代目康重の薙刀・安土桃山時代

武州下原住康重の薙刀

安土桃山時代の二代目康重の薙刀である。銘は武州下原住康重で刀長五十・五糎、反り一・九糎、表に梅の木彫物がある。薙刀拵は金梨子地塗に松竹梅と葵紋を金蒔絵にして散らし、総金具は銀磨地に唐草紋を毛彫にしている。この拵は尾張徳川家伝来品で、五瓜のうちに尾張葵を納めたもので陸奥梁川藩大久保家の紋である。梁川藩は尾張徳川家二代目光友の三男義昌が幕府から三万石を給与され成立した藩である。四代通春(宗春)の時に廃藩となる。

◇散歩のみどころ

切り通しの日枝神社から小津の熊野神社まで、凡そ5kmのなだらかな行程。日枝神社から北浅川に架かる一本橋を渡り、都指定重要文化財の毘沙門天がある宝生寺へ。大幡紙で有名だった紙谷橋を渡り、菅原神社から元木と上野原の石仏を見る。その後、下原刀匠国重鍛刀の石碑を見、夕焼け橋を渡って陣馬街道に出る。新撰組隊士中島登出生の石碑を見て、恩方市民センターへ。来た道を戻り、更に川原宿交差点に出て、鎌倉古道の文殊の越を通り、辺名の桜に到着。庚申塔や芭蕉の句碑が有名。バス停車場の道を左へ行くと、作家きだみのるの仮寓医王寺に着く。ここからモリアオガエルの道へ戻り、圏央道の下へと歩く。その近くに下原刀鍛冶発祥の石碑が建っている。さらに歩き、小津の獅子舞いで知られる熊野神社に到着。解散。

①日枝神社

切通しの入口に日枝神社がある。何時の時代に建てられたかは不明だが、武蔵国由比の牧の守護神として大政官符により建てられたという伝承がある。鳥居の傍らには、庚申塔と地藏が祀られている。

この辺りを神戸（ごうど）と呼び、式分方町の旧小名であった。新編武蔵風土記稿に「西北の限り、山王林山は日枝神社」とある丘のことである。



鳥居

●切り通しの変遷

八王子市の追分から北西に伸びる陣馬街道は明治以前から、案下道、佐野川往還とよばれていた。

途中恩方村に入る前に神戸付近で、小田野丘陵の端が北浅川まで伸びて、人馬は通れず浅川に仮設の橋を架け、大幡川原の川越と呼ばれ渡っていたが、大雨の都度流されていた。

この川越えは明治十七年頃まで利用されていたが、不便解消を願う西寺方村の有志により明治十七年（一



切り通し

八八四）四月、神奈川県に丘陵の開削願いをだし、翌年切り通しが完成した。

これまでは神戸、大幡、上野原、上宿、松竹に通ずる道であったが、さらに神戸、小田野、川原、松竹の道が増えるようになり馬車や荷車が短時間で通行できるようになった。

三十八年後の大正十二年（一九二三）現在のバス通りに第二の切通しが完成した。ちなみにこの頃の恩方には荷馬車十五台、荷車百九十五台、人力車六台、自転車五百台、自動自転車三台があったという。そして案下、小津、醍醐に電灯が引かれ、牛馬の時代からエンジンの時代へと変わっていった。

翌年の大正十三年には八王子から川原宿まで初めて乗り合いバスが開通、さらにその翌年には上案下まで開通した。当時は八王子・上案下間は約五十分かかり、定員十二人の乗り合いバスが一日七往復していたという。



神戸の切り通し付近

②北浅川の本橋

切通しから北へ数分歩くと北浅川に出る。そこには一本橋と呼ばれる小さな橋が架かっている。旧陣馬街道（佐野川往還）で、宝生寺へ行くときなどは、この橋を利用していた。



一本橋

以前は橋桁や抗は丸太で造り横板を止めただけの橋で風情があった。いまでは厚いベニヤ板が敷いてあり鉄パイプの杭と太いヒューム管が据えてある。しかし、すこし離れて見ると面影が未だに残っている。

③大幡山蓮華院宝生寺 都

西寺方町九九八

宗派 真言宗智山派

本尊 不動明王

寺宝 木造毘沙門天立像 都

氏照文書など

開山 明鑊（めいばん）上人

開創 応永三十二年（一四二五）

真言宗京都智積院末。鎌倉末期に

創建されたと伝えられる。大幡観音

堂の別当寺である。天正十九年（一

五九一）には御朱印十石を拝領して

いた。戦国時代には滝山城主北条氏

照の帰依を受け一時滝山城下に移り

祈願所となった。江戸時代には京都

報恩寺末として真言宗関東十一談林

の一つとなり、塔中當福院他、末寺

三十八ヶ寺を有し、多摩有数の名刹

となった。

この寺は寛永年間（一六二八〜四

四）に中興し、境内の観音堂は天明

年間（一七八一〜八九）に中興した

が、明治三十五年廃堂。明治十九年

報恩寺から智積院末に移行。昭和二十年八月太平洋戦争により本堂、寺院、庫裏、表門、中門、鐘楼堂等全てを焼失した。戦後に本堂、庫裏、鐘楼、書院、山門など徐々に再建し、昭和五十三年「大幡山宝生寺史」を発行。現在真言宗智山派。明治初年廃仏毀釈により、廃寺とされた寺は、川町藤左衛門谷稻荷山宝蔵院（江戸後期）、式分方町由井山報恩寺、下恩方町上宿源正院で、宝生寺に合併した。



毘沙門堂



本 堂



大幡山宝生寺山門

●木造毘沙門天立像 都

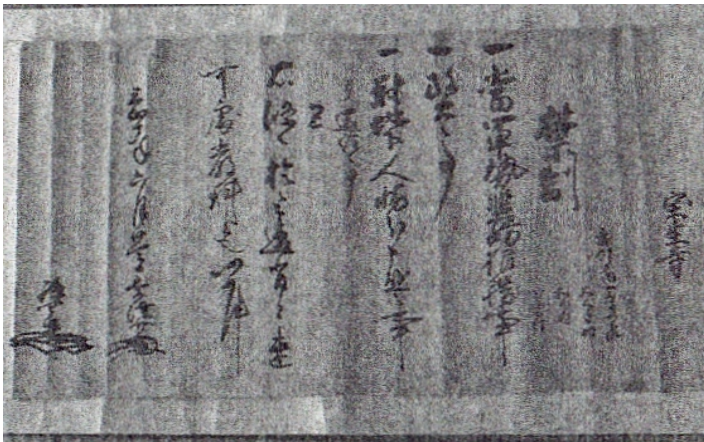


木造毘沙門天立像
(都指定文化財)

鎌倉時代中期の作で寄木造り、像の高さ九十一cm、彩色、彫眼。甲冑に身を固めた典型的な姿で、毘沙門堂内の厨子に安置されている。
四天王、十二天の一つ。須弥山中腹北方に住む。夜叉、羅刹を率い北方世界を守護し財宝を守る。右手に宝塔、左に鋒または宝棒を持つ。俱毘羅、多聞天とも言われる。日本では七福神の一つ。インド神話では、財宝の神。

●北条氏照書簡他

(宝生寺文書)



北条氏照制札・宝生寺文書

戦国時代の中期から末期の文書五点で、氏照の書状他、八王子城攻撃の際に豊臣方から出された禁制書などがある。

禁制

武州之内一ふかたの下致

大はた村

八日市村

(ママ)

一 當郡勢濫防狼藉事、

一 放火之事、

一 對地下人非分申縣之事、

還住之事、

以上、

右條、於令違背者、速可處嚴科者也、
仍如件、

(木村一)

常陸介 (花押)

(前田利長)

孫四朗 (花押)

天正十八年六月廿四日

●「夕焼け小焼け」の像

宝生寺境内には郷土の生んだ詩人、中村雨紅の「夕焼け小焼け」の像がある。

本名高井宮吉。明治三十年（一八九七）二月六日、宮尾神社宮司高井丹吾の三男として生まれる。昭和四十七年（一九七二）五月八日没。

夕焼け小焼けの詩は、実家への帰り道の情景を詩にしたものといわれている。また宮尾神社を始め恩方地区にある興慶寺、浄福寺、心源院、観栖寺には「夕焼け小焼け」に縁のある鐘や碑などがある。



夕焼け小焼けの像

④大幡紙と紙谷

小津川と山入川が合流する北側（西寺方町）に、大幡または紙谷という地名がある。今でもこの付近の川は綺麗で、昔はこの川の水を飲料水として利用していた。

ところで紙という名が付くように昔この集落では和紙作りが盛んに行われていた。これが有名な大幡紙だ。江戸時代、寺方村大幡で産していたもので楮（こうぞ）の皮を原料として漉した紙、端を切らなかつたことから「はしきらず」といわれた。

当時大幡でも紙船役（かみふねえき）といって税を納めていたが、その後、紙船判艘分を西多摩の軍畑へ譲渡、軍畑では「軍畑紙」といって、はしきらずを作っていた。明治に入つて和紙作りも徐々に廃れ作られなくなつていった。

ちなみに川口町の円福寺には大幡紙を用いた市指定の般若若経の書写が残されている。中世に川口地区を

中心にこの地方を治めていた川口兵庫介が「現世安穩、後世善処」を祈願し鳥栖寺に奉納したのである。この般若若経は八王子市指定の文化財で、応永三十一年（一四二四）から永享二年（一四三〇）の六年間にわたり宝生寺の観音堂で僧明鏤、良鏤、良俊、立川左京達により写経された。当初は六百巻といわれたが、現存するのは七十五巻のみである。一部郷土資料館で展示している。



左：小津川 右：山入川



円福寺の大般若経

⑤元木の菅原神社（天神社）

西寺方町六一三

勸請 不明

祭神 菅原道真

創建 不明

例祭 三月二十五日

承応三年（一六五四）本殿、拝殿を造営し元木の鎮守として親しまれている。祭礼は大いに賑わったという。その後社殿は明治十九年（一八八六）再建したもので、別名元木天

神ともいわれている。地名の由来は、境内に多数の神木があったからとか。



菅原神社



境内にあった
庚申塔と地蔵



現在の庚申塔と地蔵

⑥元木の石仏

下恩方（上野原）

北浅川の元木橋を北へ進み元木バス停近くに元木の石仏がある。地元では、身代わり地蔵と呼ばれている。高さ一・六五m、台座を含めると二・四m程の大きなもので右手に錫杖、左手に宝珠を持っている。

地蔵の台座には、「寛政七年八月建立 仙助政芳」と造立者の名が刻まれ左側には、「大正十二年九月一日正午、為之震災破損、翌八月廿四日修復、元木村中、中島仙助貞昆、中島九平記」とある。

大正十二年九月一日の関東大震災の影響を受けていたことを示す貴重な記録とされている。

又、元木の石仏から、五百m程行った交差点手前の上野原脇に、徳本念仏塔と地蔵が安置されている。

● 徳本上人

紀州日高の生まれ、大和吉野山中で仙人の修業、以来諸国を巡り布教に努めた。特に近畿以東、関東に至る各地に徳本行者独特の書体を刻んだ碑を見受ける。

八王子でも文化十四年（一八一七）大善寺に訪れたのを始め、八王子市内各地で徳本念仏塔を見かける。



庚申塔と身代わり地蔵

⑦ モリアオガエルの道

北浅川支流小津川の辺名辺りから入山川中流まで、川に沿った道はモリアオガエルの道と名付けられている。天然記念物に指定されているモリアオガエルが生息していたためである。奥多摩周辺などには生息が以前から確認されていたが、十数年前から八王子でも確認され、地元で保存活動が続けられている。

アマガエルに似て体は青緑色、赤褐色の斑がある。樹上に住み、水辺の樹の枝に泡状の卵を産みつける。孵化した幼生は、下の水中に落下して育つ。モリアオガエルは、本州と佐渡ヶ島山地に分布している。



六字名号と徳本塔

⑧ 刀工集団

武州下原鍛冶

日本刀は、日本民族が創造した、「くろがね」の文化資産である。

日本刀は武器の一つであり、時代の変化によって作られたものである。現在、日本刀は武器としての役割を終え、すぐれた鉄の美術品で、独特の製法による芸術作品といえる。

製鉄、鍛造、焼き入れの工程をみても古来より優れた科学的な技術が用いられており、造刀技術は世界に誇りうるものといえる。



モリアオガエル

日本刀のもつ品位、姿の美しさは反りに加え地肌や刃文のもつ鉄の粒子の結晶状態などからくる優雅さに見事なものがある。

武州下原刀鍛冶は、武蔵国多摩郡下恩方村、横川村、慈根寺村などに散在した山本姓を名乗る一族の刀工群の総称である。下原鍛冶の製作した刀剣類を通称「下原刀」と呼ぶ。

山本一族はこの地で、管領山内上杉領で上杉家の老職の滝山城主大石入道道俊、小田原北条氏の関東制圧後は八王子城主北条氏照の庇護を受け、その後、徳川家の御用を勤めた。

作刀上では、室町末期より安土桃山、江戸時代を通じて、周重、康重、照重、照廣、正重、宗重、安國の刀工を生み、代々下原鍛冶の伝統を受け継いできた。江戸初期は需要に及び作刀も多く、下原鍛冶は十家に及び「下原十家」などといわれた。江戸時代中期以降になると太平の世と江戸鍛冶の充実等により、受注も少なく衰退するが、幕末まで続いた武

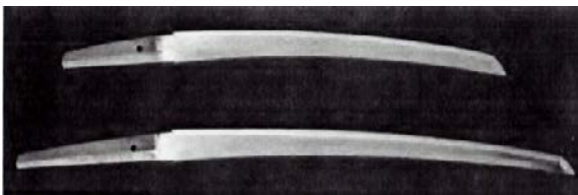
州唯一の刀工集団である。

下原鍛冶の起源は、相州鍛冶の需用先であった三浦一族が、永正年間（一五〇四〜二一）に伊勢長氏に攻められ滅亡、相州鍛冶の周重が、大石氏の招きに応じ、大石氏の別城であった浄福寺城、城下の下恩方村下原の地において、鍛刀したのに始まる。

大石氏は、天文年間（一五三二〜五五）に山内上杉家を破り、関東を制圧し、小田原北条の勢力下にはいる。周重の長子の内匠周重は北条家三代氏康より「康」を賜わり康重と名乗る。次子の長門周重は氏康の次男氏照より「照」を賜わり照重と名乗る。照重は横川村に分家独立し、照廣、正重、廣重は照重家より分家独立する。

天正十八年（一五九〇）に八王子城は天下統一の秀吉の軍勢に攻められ落城。小田原城も開城して小田原北条家は滅亡する。徳川家康が江戸にはいるが、北条家から受けていた

屋敷除地などの権利はそのまま認められ江戸幕府の御用鍛冶となる。宗國、安國の名乗りは水戸光圀から賜わったものといわれる。多くの下原鍛冶の作品が現存している。



大小の一腰の銘



「武州下原住廣重」の銘



下原刀鍛冶
発祥の地碑



下原刀匠
康重鍛刀の地碑



下原刀匠山本但馬
國重鍛刀の地碑



康重家代々の内墓



下原刀匠山本外記利長家の石碑

● 下原刀匠照重鍛刀の地

下原刀の創始者周重の三男照重は、初めは「長門周重」を名乗ったが、後に分家。現在の横川町に移り、領主北条氏照から「照」の字を賜り「照重」と改め鍛刀に従事した。照重の家系からは、その後廣重や武蔵太郎安國といった、下原を代表する刀工が出た。



山本家前の延命地藏



照重家代々の内墓(山本家)



下原刀匠照重鍛刀の地碑



横川下原公園

●横川下原公園

横川町の中央高速道路近くにあるこの公園は、照重家の所有地を八王子市が購入したものである。園内には木道の散策路や日時計、それに櫺などが生い茂る公園である。北側は城山川と大沢川の合流地点になっており、当時「照重」の鍛刀場であったといわれているが定かでない。さらに公園の西側にはかつて鋳物師の加藤家があったと伝え聞く。



武蔵太郎安國の墓



刀匠武蔵太郎安國鍛刀の地

●武蔵太郎安國

安國家は下原公園より南東の元八王子鍛冶屋敷近くにあり、廣重家、宗國家鍛刀の地という。
武蔵太郎安國の墓には「山ト有居士」墓誌には「安國斎怒山ト有居士」と刻まれている。

●下原鍛冶

室町時代末期、山本姓を名乗る周重という刀工が、滝山城主大石定久の招きで、現在の下恩方町辺名に移住してきたのがはじまりという。北条氏、徳川氏の保護を受けて繁栄した。下恩方町一二六に「市史跡 下原刀鍛冶発祥の地」の碑が建っている。

下原刀の特徴は、下原肌と呼ばれる渦巻風の連続文が中央部にできていることで、地金が粗く実用本位の武用刀に属する。

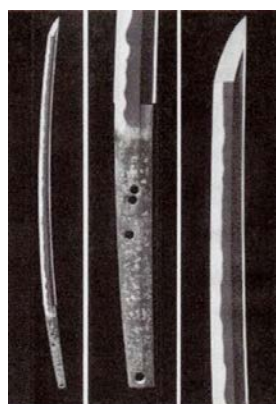
二代目周重は北条氏康より「康」の字を賜わり「康重」と称し、代々宗家は康重を名乗った。康重は下原の地（下恩方八十五）に移り、以来この近辺で作られる刀を「下原刀」と呼ぶようになり、山本一族の刀匠を称して「下原鍛冶」と呼んだ。「市史 下原刀匠康重鍛刀の地」の碑が建っている。

江戸時代には宗家康重をはじめ、

照重、國重、廣重、武蔵太郎といった分家も幕府の御用鍛冶として活躍した。中でも武蔵太郎は水戸光圀の槍を鍛えて「安國」の名を賜わり、八代將軍吉宗の前で上覧鍛冶を行うなど、下原刀鍛冶の一代を築いた。安國は享保十五年（一七三〇）に没し、墓は元八王子町二一八四〇の山本家墓地内にある。

幕末には「下原十家」といわれるほどに栄えたが、現在ではその六家のみが残っている。下原刀関係の碑はすべて個人の宅地内にある。

また、下原鍛冶は槍も多く制作していた事は重要で、他の刀工が槍の製作法を忘れた江戸初期にあっても制作出来、その技を伝えていたという。



武州下原刀・康重の作

●刀にまつわる表現

「切羽つまる、反りがあわぬ、もとの鞘（さや）におさめる、伝家の宝刀、鎬（しのぎ）を削る戦い、鍰（つば）ぜり合い、鞘当て、焼きをいれる、焼きが鈍（なま）った、つけ焼刃（やきば）、地がねがでる、折り紙つき、土壇場（どたんば）、懐劍（ふところがたな）、目貫（めぬき）通り、おっとり刀、抜き差しならぬ、抜いたら最後、身から出た錆（さび）、抜き打ち、切れ味がよい、快刀乱麻（かいとうらんま）を断つ、真劍にとり組む、真劍勝負、単刀直入、一刀両断、一刀のもとに、両刀づかい、大上段にふりかぶる、太刀打ちできない、助太刀、両刃（もろは）の劍、横槍を入れる。」などがある。

●船着き場（夕焼け橋）

下恩方町を流れる北浅川に歩道のみの夕焼け橋が架かっている。川沿いの南側には自然を生かした小田野中央公園がある。

この夕焼け橋の北側は約10mにわたり、堤防の下が段差になっている。ここがかつての船着き場の跡と聞く。以前は下原から小津・山入方面や、小田野方面に船で往来していたという。また、一説には下原鍛冶専用の船着き場であったともいわれている。



船着き場跡（夕焼け橋）

⑨文珠の越

恩方上宿から辺名に近い古道の左側に、赤い帽子に赤いべべ、青い前垂れを着けた文珠菩薩像がある。土地の人は「文珠の越」とか、「文珠様」といつている。昔も今もこの峠の道を越えて小津の熊野神社や神明神社へお参りに行く。「ほれて通れば文珠の越の、白い狐も怖くない」と昔の歌謡にあるとか。古くから暗い田舎道のようにあり、鎌倉古道でもある。



文珠の越

（現在、文珠菩薩像はここにはない）

⑩辺名の桜

下恩方工業団地入口交差点を小津町方面に暫く行くと三叉路に出る。その三叉路の真中に二本の桜が植えられている。昔から土地の人からは「小津（乙）な所に辺名の桜」と呼ばれ親しまれている。現在の桜は三代目といわれている。

この桜は別の名を「義経千本桜」といい源氏の隆興繁栄を願って全国に千本の桜を植えた千本目だという伝説がある。

また、秩父の莊司、畠山重忠公が鎌倉往還の道しるべに鶴岡八幡宮の桜を賜わり植えたという説もある。北条氏照の父、氏康が戦勝祈願のために植えたという説などもある。

元暦元年（一一八四）の頃、重忠が植えたという桜は太木だったという。「恩方村誌」によると木の高さは三十間（五十四m）東西の枝の長さは七間（十三m）南北十二間（二十二m）あったという。大正八年頃に写

されたと思われる二代目の桜といわれる写真の根元を見ると太かった様子が伺える。

江戸期、千人同心たちが大山参りの際に桜の幹の上で酒杯を交わしたとも伝えられている。また地元では「小津なところに辺名の桜

お手は届かぬ見るばかり」
「一本で千本桜辺名かな」と詠まれ親しまれている。



辺名の桜



辺名の桜・二代目大正八年頃

● 庚申塔三猿駒牽き

小津町へ向かう辺名の停留所の奥に庚申塔がある。以前は椎の木の大木の下に置かれていたが、道路整備工事のため現在は辺名の桜脇に安置されている。

「奉建庚申供養塔、天明三癸卯八月朔日、施主辺名講中 世話人青木新兵衛」と刻まれている。



芭蕉句碑

この庚申塔は青面金剛の台座に彫られた三猿が珍しい。一匹の猿が馬に乗り、別の一匹が手綱を引き、残る一匹が鞭を持って馬を急かせる構図となっている。この庚申塔の近くには

「志ばらくは花のうえなる月夜哉

芭蕉翁」と

刻まれた碑がある。

またバス停前には自然石に人指し指の形が彫られ「今熊道安政二年五春木村栄次郎」の刻銘がある。ここはその昔今熊詣の古道であったという。



馬に乗る猿・手綱を引く猿
鞭を持つ猿



庚申塔



今熊山への道標
(人差し指に陰刻)



金山神社

⑪ 金山神社

下恩方一三四

圏央道下のモリアオガエルの道から入った所に金山神社がある。この神社の創建年代は明らかではないが、一説によると下原刀鍛冶の祖、山本周重が勧請したと伝えられている。社宝は江戸初期の棟札。



醫王寺

⑫ 薬師山医王寺

下恩方一四四

宗派 曹洞宗 下恩方心源院末
本尊 釈迦如来
開山 禅室祖上人、
創建 慶長年間(一五九六
〜一六一五)

第二世林翁上人が一字を現在地に建立。その後幾多の興廃を経て現在に及ぶが無住寺である。
かつては、作家きだみのるが住んでいた。また、境内には石田信春の「いつまでも乃こせ志友を松乃下」の碑がある。



以前の医王寺



医王寺

●作家・きだみのる

辺名バス停左を暫く行くと医王寺がある。戦時中この寺に疎開し、戦後もとどまり多くの作品を生んだ小説家がきだみのるである。

彼の本名は山田吉彦、ファールブル昆虫記の訳者として知られている。明治二十八年一月十一日、鹿児島県奄美大島の医師、山田吉郎の長男として生まれる。十三歳の時、父親の関係で台湾に住む。帰国後、東京神田のアテネ・フランセ校の創始者ジョセフ・コットと知りあい教師となる。昭和九年から十四年にかけて渡仏、フランス政府奨学生としてパリ大学で社会学、民俗学を学ぶ。

彼が医王寺に來たのは、昭和十八年四十八歳の時、終戦後も住み続けその体験をもとにした代表作「気違い部落周游紀行」を執筆。昭和二十三年毎日出版文化賞受賞後映画にもなった。

昭和三十年八王子市議会議員選挙

に立候補し、得票数二十三票で落選した。その後は捕鯨船に乗ったり、家財道具を積んだ愛車「ドブネズミ号」で国内各地を放浪し、天衣無縫のエピソードを数多く残す。

昭和五十年最後に住んだ岩手県大船渡市で胆道結石のため八十年の生涯を閉じる。残された膨大な蔵書は遺族により八王子市中央図書館に寄贈された。

大船渡市の尾崎岬には地元有志により、きだみのるの記念碑が建立されている。碑文には気違い部落周游紀行の一節から「文化の表面に浮かぶものは常に散る花だ。新しい蕾は潜んだエネルギーから次々に咲いてくるのだ」と刻まれている。



毎日出版文化賞作品



小津の熊野神社



きだみのる氏
(昭和 30 年前後)

⑬ 小津の熊野神社

小津町一四二

祭神

速玉男命
事坂男命

伊弉冉命

勧請、創建は不詳だが、小津の宮地区には古くから和歌山県熊野速玉大社を勧請したと伝えられている。境内には秋葉社を祀っている。

八王子市内で熊野と名の付く神社は約十一ヶ所もある。さらに地名や橋などを加えると十六ヶ所にもなる。この数からみても市内をはじめ、近郷近在の人々が如何に熊野を深く信仰していたかがわかる。



本殿入口の狛犬



奥 殿



拝 殿

●小津の獅子舞

獅子舞は、約四百年前に始まったといわれ毎年八月十六日に近い日曜日に五穀豊穡、雨乞いを祈願して奉納されている。雄獅子、金獅子、雌獅子三頭の獅子頭が普通の形より長いので重箱獅子とも呼ぶ。舞いの所作や歌の節が悠長なのが特徴。



小津の獅子舞



小津の獅子舞

◎参考資料

- ・八王子刀道愛好
- ・らいぶらい
- ・日本石仏辞典
- ・石川日記
- ・2000の八王子を撮る会
- ・文化財ア・ラカルト
- ・東京の歴史を語る
- ・東京都教育文化財
- ・よみがえる武蔵国の刀工展
- ・古今鍛冶備考
- ・新編武蔵風土記稿
- ・八王子辞典
- ・日本老樹銘木誌
- ・三多摩風土誌
- ・八王子発見
- ・歴史と浪漫の散歩路
- ・八王子寺院めぐり
- ・八王子市史
- ・歴史見て歩き
- ・その他インターネット各ページ
- ・八王子市郷土資料館資料
- ・昭文社
- ・八王子市地図
- ・八王子市観光マップ